

リレー随想

第9回

福岡いのちの電話評議員

藤林 武史

(福岡市こども総合相談センター所長、医師)



自殺を思いとどまる究極の予防

子ども時代に数多くの辛い経験をした人には、大人になった時に、うつ病をはじめさまざまな心身の疾患の発症や自殺企図に至るケースが多いといった、有名な研究があります (Centers for Disease Control and Prevention: ACE study)。「児童期逆境体験研究」と訳され国内で紹介されることも増えてきましたので、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。ここでいう子ども時代の辛い経験とは、虐待やネグレクトが含まれますが、その他に両親間のドメスティックバイオレンス、家族の精神障害や薬物乱用など、直接子どもに危害が加わらない体験も含まれます。

しかし、皆が皆、心身の病気を発症するわけではありませんし、自殺行動を起こすわけでもありません。数々の苦労はありながらも、健康で幸せな人生を歩んでいらっしゃる方が大勢いることも事実です。では、その後の人生の大きな分かれ目はどこにあるのでしょうか？

心病む母親から育てられ、時には虐待的なことも経験してきた精神科医の夏莉郁子^{なつかり}さんは、ご自身の過去を振り返って、人との出会いの重要性を語っています (夏莉郁子「もうひとつの心病む母が遺してくれたもの」「人は、人を浴びて人になる一心の病にかかった精神科医の人生をつないでくれた12の出会い」)。それは、子ども時代に一緒にいてくれた親戚であったり、大人になってから話を聴いてくれた友人だったりします。どのような辛くて過酷な体験をしたとしても、人

との出会いと関わりは、安心と自信、将来の夢や希望を与えるものと思います。それは、私が児童相談所長を務めてきた15年の間に、多くの子どもたちやその周囲の支援者から学んだことでもありました。

児童福祉の制度の中に里親制度というものがあります。家庭の中で虐待を受けた子ども、自殺や事故で家族を失った子ども、親が病気で入院した子どもたちの中には、その後の何年間かを里親さんの家庭で暮らす場合があります。数カ月という短期間で元の家庭に戻る子どももいますし、大人になるまで里親家庭で暮らす子どももいます。いろいろなことで不安や心配になったり、明日からのことに怯えなくてもいい、安心で安全な生活は子どもの成長を育み、将来の希望を与えます。たとえ、短期間で実親の元に帰って行ったとしても、この期間の里親家庭で暮らした記憶は一生残り続けます。前述した夏莉さんは、幼児期に数年間伯母宅で過ごした生活が、何ものにも代えがたい大切な思い出として夏莉さんのその後の人生の「安定」と「回復」の礎となったと、書かれています。子ども時代に暮らしたもう一つの家庭での温かい体験は、大人になったときの心の防波堤となり、自殺を思いとどらせる究極の予防につながるのでしょうか。

この国には、まだまだ、里親のなり手が足りていません。子どもたちの将来にわたる幸せのために、里親制度に関心を持っていただける方が、一人でも多く増えることを期待しています。

里親についての詳しいことは
「福岡市こども総合相談センター」へお問合せください。

【代表電話】 092-832-7100

【ホームページ】 <http://www.city.fukuoka.lg.jp/kodomo/egaokan/>